

インダストリー 4.0 と 日本のデジタルものづくり

日本のものづくりの未来とは。
日本の製造業の勝機はどこにあるのか。

東京大学大学院経済学研究科 教授
東京大学ものづくり経営研究センター長

藤本隆宏

「4.0」論の真水部分とは

2～3年前からインダストリー 4.0、IoT など「重さのある物財の世界」が「重さのない ICT の世界」とつながり始めたことが産業界や言論界で大きく取り上げられ、ブームと言ってもよい状況になった。こうなると、混乱した言説が多発するのは世の常である。

こうしたブームは過去にも何度もあったが、パターンはよく似ていて、まずマスコミ等が先導して「〇〇を知らねば時代遅れだ」と喧伝してブームをつくり、主に都会の人々が熱狂して本や論説を読みあさり、「〇〇に乗らねば手遅れだ」との幻想が広まり、流行はピークに達する。しかしそのころから「実際にやってみたが〇〇は大したことではないぞ」といった懐疑論が出始め、幻想期から幻滅期へ移行する。人々は今度は幻滅論をたくさん読み「〇〇は時代遅れだ」となり、ほとんどの人が「〇〇」を忘れて流行サイクルが終了する。アメリカでは hype cycle ともいう。先年の「3次元プリンターブーム」を思い出していただきたい。

しかし重要なことは、過去においても流行が来て流行が去った時、たいていは経済・社会・技術の正味の進歩、つまり「真水の部分」が存在

したということである。3次元プリンターにしても、現在これを確実に使いこなして社業の発展につなげている人たちは存在する。彼らの多くはブーム自体には乗らず真水部分をものにするために地道な実験を繰り返していたと思う。

したがって、筆者は流行現象を否定はしない。そこにはたいてい真水部分の進歩があるからである。しかしそうであるなら、流行が始まった時点で「これの行き着く先の真水部分は何か」を徹底的に考え、そこに直線的に向かう方が効率的である。逆に言えば、「覚醒→幻想→幻滅→忘却」のサイクルに乗る人たちは、かなりムダな知的活動を強いられるのである。

実は、この「流行サイクル」の構図は、自動車の世界における自動運転の話と論理構造がほぼ一

図1 デジタル化の3層構造とインダストリー 4.0

